

遠野物語

柳田国男



角川文庫

とう の もの がたり
遠野物語

やなぎたくに お
柳田国男



角川文庫 1295

昭和三十年十月五日 初版発行
昭和四十三年七月三十日 十版発行
昭和六十二年八月三十日 改版三十四版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

編集部(〇三)二三八—八四五—
電話

営業部(〇三)二三八—八五二—

千一〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——大谷製本

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

遠野物語

柳田国男



角川文庫 1295

本書は著作権継承者の了解を得て、現代表記法により、
原文を新字・新かなづかいにしたほか、漢字の一部をひ
らがなに改めた。

（編集部）

目次

初版序文

再版覚え書き

遠野物語

遠野物語拾遺

初版解説

解説

年譜

索引

折口 信夫 一五

大藤 時彦 二〇

二六

三二

九 五

一三

七

初版序文

この話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分をりをり訪ね来たり、この話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減せず感じたるままを書きたり。思ふに遠野郷にはこの類の物語なほ数百件あるならん。われわれはより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野よりさらに物深き所には、また無数の山神山人の伝説あるべし。願はくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは陳勝吳広のみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻より十余里の路上には町場三か所あり。その他はただ青き山と原野なり。人煙の稀少なること北海道石狩の平野よりもはなはだし。あるいは新道なるがゆゑに民居の来たりつける者少なきか。遠野の城下はすなはち煙花の街なり。馬を駅亭の主人に借りて独り郊外の村々を巡りたり。その馬は黔き海草をもちて作りたる厚総を掛けたり。虻多きためなり。猿が石の溪谷は土肥えてよく拓けたり。路傍に石塔の多きこと諸国その比を知らず。高処より展望すれば早稲まさに熟し、晚稲は花盛りにて水はことごとく落ちて川にあり。稲の色合ひは種類によりてさまざまなり。三つ四つ五つの田を続けて稲の色の同じきは、すなはち一家に属する田にして、いはゆる名処の同じきなるべし。小字よりさらに小

さき区域の地名は、持主にあらざればこれを知らず。古き売買譲与の証文には常に見ゆるところなり。附馬牛の谷へ越ゆれば早池峰の山は淡く霞み、山の形は菅笠のごとく、また片かなのへ字に似たり。この谷は稲熟することさらに遅く満目一色に青し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛を連れて横ざりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始めは小さき鶏かと思ひしが、溝の草に隠れて見えざればすなはち野鳥なることを知れり。天神の山には祭りありて獅子踊りあり。ここにのみは軽く塵たち、紅き物いささかひらめきて一村の緑に映じたり。獅子踊りといふは鹿の舞ひなり。鹿の角をつけたる面をかぶり童子五、六人剣を抜きてこれと共に舞ふなり。笛の調子高く歌は低くして側にあれども聞きがたし。日は傾きて風吹き酔ひて人呼ぶ者の声も淋しく女は笑ひ児は走れどもなほ旅愁を奈何ともするあたはざりき。盂蘭盆に新しき仏ある家は、紅白の旗を高く揚げて魂を招く風あり。峠の馬の上において東西を指点するに、この旗十数か所あり。村人の永住の地を去らんとする者と、かりそめに入り込みたる旅人と、またかの悠々たる霊山とを黄昏は徐に來たりて包容し尽くしたり。遠野郷には八か所の観音堂あり。一木をもちて作りしなり。この日報賽の徒多く、岡の上に燈火見え伏鉦の音聞こえたり。道ちがへの叢の中には雨風祭りの藁人形あり。あたかもくたびれたる人のごとく仰臥してありたり。以上は自分が遠野郷にて得たる印象なり。

思ふにこの類の書物は少なくも現代の流行にあらず。いかに印刷が容易なればとて、こんな本を出版し自己の狹隘なる趣味をもちて他人に強ひんとするは、無作法の仕業なりといふ人あらん。されどあへて答ふ。かかる話を聞きかかる処を見て來て後、これを人に語りたがらざる

者はたしてありや。そのやうな沈黙にしてかつ慎み深き人は、少なくとも自分の友人の中にはあることなし。いはんやわが九百年前の先輩『今昔物語』のごときは、その当時においてすでに今は昔の話なりしに反し、これはこれ目前の出来事なり。たとへ敬虔の意と誠実の態度とにおいて、あへて彼を凌ぐことを得と言ふあたはざらんも、人の耳を経ること多からず、人の口と筆とを情ひたることはなほだわづかなりし点においては、彼の淡泊無邪気なる大納言殿かへつて来たり聴くに値せり。近代の御伽百物語の徒に至りてはその志やすでに陋かつ決してその談の妄誕にあらざることを誓ひ得ず。ひそかにもつてこれと隣を比するを恥とせり。要するにこの書は現在の事実なり。単にこれのみをもつてするも立派なる存在理由ありと信ず。ただ鏡石子は年わづかに二十四五、自分もこれに十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生まれながら、問題の大小をもわきまへず、その力を用ゐる所当を失へりと言ふ人あらば如何。明神の山の木兎のごとく、あまりにその耳を尖らしあまりにその眼を丸くしすぎたりと責むる人あらば如何。はて是非もなし。この責任のみは自分が負はねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんかも

柳田 国男

再版覚え書き

前版の『遠野物語』には番号が打ってある。私はその第一号から順に何冊かを、話者の佐々木君に送った記憶がある。その頃友人の西洋に行っている者、またこれから出かけようとしている者が妙に多かったので、その人たちに送ろうと思って、あのような扉の文字（注―此書を外国に在る人々に呈す）を掲げた。石黒忠篤君が船中でこの書を読んで、詳しい評をしてよこされた手紙などは、たしかまだどこかに保存してある。外国人の所蔵に属したのも、少なくとも七、八部はある。その他の三百ばかりも、ほとんど皆親族と知音とに頒^わけてしまった。全くの道楽仕事で、最初から市場にお目見えをしようとはしなかったのである。

この書の真価以上に珍重せられた理由はこれだと思う。今度も同じような動機で覆刻を急ぐことになったのだが、以前にも私は写しますなどという人がおりおりはあるので、多少の増訂をして二版を出そうと思い、郷土研究社にはその予告をさせ、かつ古本商には警告を与え、佐々木君にはもつと材料があるなら送ってくるように言ってやった。同君も大いに悦び、手帖にあるだけを全部原稿紙に清書して、ある時持って来て、どきりと私の机の上に置いた。これを読んでみるとなかなか面白いが、なにぶんにも数量が多く、また重複があり出したくないものがまじっている。これを選びわけて種類を揃え、字句を正したり削ったりするために、自分

でもう一度書き改めようとした。あるいはきたなくとも元の文章に朱を加えた方が早かったかもしれない。自分の原稿がまだ半分ほどしか進まぬうちに、待ちかねて佐々木君が『聴耳草紙』を出してしまった。

『聴耳草紙』は昔話集であるのだが、あの中には私がこちらへ載せるつもりでいた口碑類を若干は取り入れてある。昔話も二つか三つ、ぜひとも『遠野物語』の拾遺として出そうと思っていたものが、聴耳の方で先に発表せられてしまった。そうでなくてもおくれがちであった仕事、これでいよいよ拍子抜けをして、ついに佐々木君の生前に、もう一度悦ばせることができなかったのは遺憾である。

今度は事情がちがうから、二十五年前の『遠野物語』を重版するだけに止めておこうという意見もあったが、それではこれに追加するつもりで、せっかく故人の集めておいた資料が、散逸してしまうかもしれぬ懸念があるもので、やはり最初の計画の通り、重複せぬかぎりは皆これを付載することにした。この中には自分が筆を執って書き改めたものが約半分、残りは鈴木君が同じ方針のもとに、刪定整理の労を取ってくれられた。順序体裁等はほぼ本編に準ずることにして、これまた同君に一任し、さらに『郷土研究』その他の雑誌に散見する佐々木君の報告で、性質の類似するものだけはこの中に加えておいた。こうして見ると初版の『遠野物語』ばかりが、事柄は同じであるのに文体がちがい、かつ引き離されてあることがいかにも理に合わない。あるいはこれも書き改めて、類をもって集めた方がよかったのかもしれないが、それは自分にとって記念の意味があまりに薄くなるのみならず、一方旧本に対する無益の珍重沙汰が、

なおいつまでも続かぬともかぎらぬ。そう大したものではなかったということを、ひろく告白するためにも原形を存しておいた方がよいと思うのである。

実際『遠野物語』の始めて出た頃には、世間はこれだけの事すらもまだ存在を知らず、またこれを問題にしようとするある一人の態度を、奇異とし好事と評していたようである。しかし今日は時勢が全く別である。こういう経験はもういくらでも繰り返され、それが一派の学業の対象として、大切なものだということもまた認められてきた。わずか一世紀の四分の一の間にも、進むべきものは必然に進んだ。これに比べるとわれわれの書齋生活が、依然として一見一聞の積み重ねに苦勞していることは、むしろ恥じかつ歎かねばならぬのである。少なくとも遠野の一溪谷ぐらゐは、いま少しく説明しやすくなっている。でもよいはずであったが、伊能翁はまず世を謝し、佐々木君は異郷に客死し、当時の同志は四散して消息相通せず、自分もまた年頃企てていた広遠野譚の完成を、断念しなければならなくなっている。かくのごときは明らかに蹉跌さくたつの例であって、毫も後代に誇示すべきものではない。嗣いで起こるべき少壮の学徒は、むしろこの一書を繙ひもとくことによって、相戒めてさらに切実なる進路を見出そうとするであらう。それがまたわれわれの最大なる期待である。

昭和十年六月

遠野物語

題目

下の数字は話の番号なり

地勢	一、五、六七、一一一
神の始	二、六九、七四
里の神	九八
カクラサマ	七二―七四
ゴンゲサマ	一一〇
家の神	一六
オクナイサマ	一四、一五、七〇
オシラサマ	六九
ザシキワラシ	一七、一八
山の神	八九、九一、九三、一〇二、一〇七、一〇八
神女	二七、五四
天狗	二九、六二、九〇
山男	五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二
山女	三、四、三四、三五、七五

狼 おおいぬ	猿 さる	河童 あつち	雪女	まぼろし	魂の行方	前兆	家の盛衰 マヨヒガ	家のさま	昔の人	館の址	姥神	塚と森と	蝦夷の跡	仙人堂	山の靈異
三六―四二	四七、四八	四五、四六	一〇三	二二、七七、七九、八一、八二	二二、八六―八八、九五、九七、九九、一〇〇	二〇、五二、七八、九六	六三、六四	八〇、八三	八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四	六七、六八、七六	六五、七一	六六、一一一、一二三、一一四	一一二	四九	三三、三三、六一、九八